

会 議 録

□全部記録 ■要点記録

1 会議名	令和6年度 第1回 姫路市総合教育会議
2 開催日時	令和6年5月28日(火) 16時00分～17時00分
3 開催場所	姫路市役所本庁舎 10階 第2会議室
4 出席者又は欠席者名	<p>〔構成員〕</p> <p>清元市長、久保田教育長、中野教育長職務代理者、山下教育委員、森下教育委員、 角谷教育委員</p> <p>〔関係者〕</p> <p>山田副市長、加藤総合教育監、福田政策局長、平田教育次長、平山教育次長</p> <p>〔事務局〕</p> <p>高等教育室 : 高橋室長、中田主幹、篠原課長補佐</p> <p>教育委員会事務局 : 松本教育総務部長、山下教育企画室長、森学校教育部長、砂山生涯学習部長、 濱田総務課長、藤保教育企画室主幹、宮崎教育企画室主幹、島田総務課係長</p>
5 傍聴の可否及び傍聴人数	傍聴人 5名
6 議題又は案件及び結論等	第3期姫路市教育振興基本計画の策定について
7 会議の全部内容又は進行記録	詳細については別紙参照

総合教育監	<p>1 開会 令和6年度第1回姫路市総合教育会議を開会する。</p>
市長	<p>2 挨拶 (市長挨拶) 今回は、久保田教育長のもと、新しい体制となった教育委員会の皆さまとの初めての総合教育会議となる。新たに山田副市長と加藤総合教育監が就任し、教育次長も2人体制とした。この新しい体制で、教育委員会との緊密な連携の下、教育の充実に全力で取り組んでいきたい。 本日の議題は、第3期姫路市教育振興基本計画の策定についてである。姫路市教育大綱及び第2期教育振興基本計画は、コロナ禍の始まりの令和2年に策定した。それからの4年間、学校教育の現場は激動の時代であったと思う。現場の教職員の皆さまや子供たちが、授業や学校行事について工夫を凝らして取り組んだ結果、学校教育のあり方を根本から見直す契機になったのではないかと声をいただいている。 「姫路市の教育が充実しているから、このまちに住み続けたい」と思っただけのよう、この地域で先進的かつ持続的な教育を進めていきたい。姫路市の人口が52万人を下回りそうどころまで減少してきており、ここで踏みとどまることが重要と考えている。第3期教育振興基本計画が子供たちに夢と希望を与え、そして、このまちの持続的な発展に資するよう、皆さまのご意見を頂戴したい。</p>
教育長	<p>(教育長挨拶) 本市においては、令和2年3月に、令和6年度までの5年間を計画期間とする第2期姫路市教育振興基本計画を策定している。「ふるさと姫路の未来をひらく人づくり」を基本理念とし、学校教育、社会教育に関する施策に取り組んできた。ただ、この数年を振り返ると、社会は大きく変化してきている。新型コロナウイルスの感染拡大もあり、国際情勢がここまで不安定になるとは想像できなかった。また、生成AIを象徴とするテクノロジーの進化も大きい。 これからの時代は、私たちも、そして、次世代の子供たちも全く想像しなかった次元の社会を生きていくことになる。現行計画を継承しつつも、社会の将来を見据えたご意見を皆さまからお伺いしていきたい。 予測困難な時代とよく言われるが、基本理念である「ふるさと姫路の未来をひらく人づくり」というところで、将来、人でなければできないことは何なのか、また、人だからこそ教えられることは何なのか、視点を変え、新しい要素を加えた議論をしていく必要があると感じている。 皆さまからは、時には前例にとらわれないような意見も含めて、さまざまな意見を頂戴し、計画に反映させていきたい。</p> <p>3 出席者紹介</p> <p>4 議事 第3期姫路市教育振興基本計画の策定について</p> <p>資料1「第3期 姫路市教育振興基本計画の策定について」説明</p> <p>資料2「論点メモ」について説明</p> <p>私が特に重視していきたいことは、不登校といじめの問題である。近年、発達障害と診断される子供が増加しており、コロナ禍もあって就学できずに不登校につな</p>

	<p>がるということがある。そういった子供を特別な子供とするのではなく、プレスクールの段階からインクルーシブに見守っていくような地域・学校であってほしいと思う。姫路ではさまざまな特性を持つ子供たちが安心して成長できる、成長を支援していく体制があるということを、教育大綱や教育振興基本計画に盛り込んではどうか。</p>
教育長	<p>書写養護学校の視察をする中で、教育の原点が特別支援教育の中にあると感じた。インクルーシブ教育は、特性を持った子供たちだけではなく、周りの私たちにとってもプラスの面があり、大切なテーマであると感じている。</p>
市長	<p>第2期計画の策定時にも多様性を認めていこうという議論はあったが、もう少し低年齢化して、インクルーシブ教育の概念を幼児教育の中にも取り入れていくことが重要であるとする。保育士の方々も大変苦慮されていると思うが、現場ではどのように感じておられるのか。</p>
委員	<p>インクルーシブ教育を先駆けて行っているのが保育の現場である。発達障害の子供に限らず、どの子も、なじみにくさ、通いにくさを持っている。不登校児童生徒の定義に30日以上欠席という数字があるが、行き渋りが数日続いたときの初期対応や不登校になる前の予防が重要で、短いスパンで対応する目安のようなものが必要だと考える。問題が複雑化する前に解決できるようになれば、教員の負担も軽減されるのではないかと。</p>
委員	<p>不登校の一つのパターンとして、最初の休みは小さなきっかけであったが、休んでいる自分が嫌になり、そんな自分を見られたくないから休みが続き、どんどん深みにはまっていくということがある。今の社会は効率優先で〇×を簡単につけてしまう。さらに子供同士の関わりが薄くなっており、子供たちは自己肯定感を高めることが難しくなっている。友達と関わっていない状況に早めに気づいてサポートをすること、自己承認の機会をつくっていくことが重要である。</p>
委員	<p>今はどうしても世の中が早く動いていくので当たり前のように「大人真ん中の社会」になっている。子供たちに問題が起きたときに早急に介入していかねばならないときもあるし、逆に時間を与えて子供たちに解決させることも必要である。子供たちは失敗をしてその失敗を生かす経験をするのが成長につながると考える。大人が子供たちに時間の余裕を与えることができていないということ、これから考えていかなければならない。</p>
委員	<p>小さな問題として見過ごして、取り返しのつかない状況になって初めて法律相談に行くということがよく見られる。初期対応というのは重要であるとするが、児童生徒の欠席が続いた際、学校はどのように対応されているのか。</p>
教育次長	<p>学校現場は欠席の理由を把握するため、不明瞭な欠席が続くと家庭訪問を行っている。場合によっては、保護者や子供とコンタクトが取れないということもあるが、学校は丁寧な初期対応を心掛けている。</p>
教育長	<p>初期対応は重要で、予防については積極的に取り組むべきであるとするが、不登校の子供たちの状況はさまざまであり、学校に戻ることが最善ではないケースもある。その場合は学校以外の選択肢を検討することが現在の方針であり、学校に戻すことだけが目的になるべきではないということは、一言付け加えておきたい。</p>

副市長	<p>日本の教育の中で子供たちの自己肯定感をどのように高めていくのかというのは大きな論点であると考えている。アメリカで子育てをしていたとき、学校で「うちの子は〇〇ができなくてすみません」と言うと、教師に「何を言っているんだ。いいところを伸ばしなさい」と怒られるという強烈な経験をした。「教育で選ばれるまち」とは、色々な悩みを持つ色々な子供たちが安心して過ごせる、親が安心して預けられる仕組みがあり、〇×で切り分ける世界ではないということをしつかりと意識しなければならぬと痛感している。</p>
市長	<p>昨年、ドキュメンタリー映画で通信簿のない小学校の話を見た。通信簿がないことで教師は子供たちにしっかりと向き合うことができている、探究型総合学習によって子供たちは興味・探究心をどんどん深めていくというものであった。通信簿廃止は教師の働き方改革にもつながる。ゆとり教育で学力が低下したという意見もあるが、私は、道徳心・スポーツ・芸術といった面でプラスに働いたと考えており、点数や偏差値などで人を判断し過ぎている現在の状況についても、議論を進めたい。</p>
総合教育監	<p>長野県の伊那市立伊那小学校が有名で、チャイムもない、時間割もない、通知表もない公立学校である。学習指導要領はあくまでも基準であって、実は現場の裁量で色々な工夫ができるということの象徴的な事例だと考える。高校でも2年前から探究が必修になり、正解を覚えて回答して点数勝負をするという時代ではない。VUCA（将来の予測が困難な）時代において、主体的・協働的に取り組んでいく探究的な素養が学校現場で必修になっている。</p>
教育長	<p>教員が子供たちと伴走して探究する環境を整えることが重要であり、そのために引き続き働き方改革を強化していきたい。</p>
委員	<p>探究は、授業でやらされるものではなく、本来は好奇心を源泉に自ら知りたくなくて探究するものである。学校現場だけでなく、子供たちの好奇心が刺激されるような環境をつくっていくことが重要である。もう1つ大切なことは、倫理観をしっかりと持つことである。不確実な時代において、予測不可能な事態が発生しても、人として正しい判断・行動をとることができる。好奇心と倫理観の教育が、通常の学業の両軸として必要だと考える。</p>
委員	<p>私は日頃、子供たちに「あなたはどう思う？」と問いかけることを意識している。その問いに答えられる力を育てることが「こどもまんなか社会」につながるのではないか。こども基本法が制定され、こども条例をつくっている都道府県もあるが、条例が難しいならば、「こども宣言」のような形はできないか。ビジョンのような形では出せないか。</p> <p>学校のつながりについては、架け橋プログラムの取り組みがある。市内ブロックごとに、こども園、保育園、幼稚園、小学校の職員が一緒に集まって（講演会など）共通理解を底上げするような学びの場ができればいいと考える。</p>
教育長	<p>「こどもまんなか社会」は、大人がしっかりと話を聞く態度を示して、子供が安心して発言できるという形を整えていくことが重要で、大人が待たなければいけない、大人の側が変わらなければいけないと感じている。幼児は探究心のかたまりのように見えるが、いつそれを失ってしまうのかと考えると、やはり幼児教育と小学校の連携が重要であると感じている。</p>
市長	<p>子育てが重荷であるという社会の風潮、9割の人が子育てを苦痛に感じているこ</p>

	<p>とを私拭できればと思う。子供を中心としながら、大人も子育てを通して視野が広がり人格を形成する。地域の大人が子育てをしてよかったと実感しながら子供たちを真ん中で支えていく形を、どのようにつくればいいのか。</p>
委員	<p>学校以外での子供同士の関わりが減っていると思う。部活動の地域移行の話があるが、そこからさらに広げて、地域に色々なコミュニティがあり、子供たちが複数の活動に関わるという形をつくるのが大切だと考える。そこで人間関係をつくり、興味の幅を広げたり、友達を尊敬したり手助けしたりする機会を重ねることができれば、子供たちにとって大切な学びの場になると考える。</p>
総合教育監	<p>全国的に地域活動が衰退している中、姫路市は、地域コミュニティがまだまだ根強い。何か1つ打開策が出れば、姫路モデルのような形になる可能性がある。</p>
政策局長	<p>企業では「コミュニケーション能力や課題解決力を持つ人材を採用したい」という方向にシフトしている。教育の先にあるまちづくり、地域を支える人材づくりという視点で、計画・大綱について考えていきたい。</p>
教育次長	<p>新しい市立高校もできるので、生徒が通いたくなる、保護者も通わせたい高校をつくっていききたい。姫路の教育を選んでいただけるよう、姫路の教育の魅力をしっかりと情報発信していきたい。</p>
市長	<p>自己肯定感是非常に重要で、私自身も海外で生活していたときに、日本の文化や自分の郷土について誇りを持って語ることの重要性を感じた。郷土の偉人・文化・歴史を地域の中で学ぶことで、自己肯定感、郷土愛、他者への尊敬、友愛、協調性が育まれる。郷土について自ら探究できるようなプログラムがあれば、将来、ふるさとに帰ってくることもつながるだろう。世界中どこにいても称賛される姫路城、それを守ってきた先人の思いをぜひ郷土教育の中に残したい。</p>
副市長	<p>グローバル人材はまさにその点で、郷土愛・精神性が育まれて初めてグローバルに活躍できる。郷土愛・日本人としての倫理観無しに世界へ出て行っても通用しないということを私自身肌感覚で経験してきた。教育施策を考える上で本当に重要な論点である。</p>
市長	<p>5 その他</p> <p>人口減少という危機に直面し、令和2年に現教育大綱を策定してから、社会情勢は大きく変化した。コロナ禍を経て、さらに人口減少が加速している。このような困難な時代において、まちに活力を生み、明るい未来を切り拓いていくには、「人づくり」しかないと考える。教育振興基本計画・こども計画との整合性を図りながら、本市の教育施策の根本である教育大綱についても、再定義していくことが望ましい。本市の新たな教育の道標として、大綱の改定に取り組んでいく。</p>
総合教育監	<p>教育大綱の改定について、事務局としては、令和7年度早期を目途に取り組んでまいりたい。</p>
総合教育監	<p>6 閉会</p> <p>今年度は、総合教育会議を過去最多の5回は開催したいと考えている。教育振興基本計画の策定をはじめ、教育大綱の見直し、市立3高校の再編統合、不登校対策、いじめ対策など重要案件が多岐にわたっている状況に鑑みたものである。</p> <p>令和6年度第1回姫路市総合教育会議を閉会する。</p>

